

神戸大空襲 死者は 7400 人

語り部、西神中で平和の尊さを訴え

焼夷弾が頭直撃 即死／黒焦げの遺体累々



グループ〈わ〉の戦争の語り部6人と西区会メンバー2人は8月27日朝、西神中学校で2年生139人に戦争体験を語った。来年、修学旅行で鹿児島島の鹿屋海軍基地などを訪れることになっており、平和教育の一環で、〈わ〉の学習支援活動のひとつだ。写真、イラスト、焼夷弾の構造図、見出しなどのパソコン画面をプロジェクターで大きく映し、生徒の理

解を助けた。

太平洋戦争中の昭和20年6月5日朝、米軍のB29の大編隊が神戸を襲い、焼夷弾を雨霰と投下した。語り部の西阪順三（生8）さんは、燃え上がった火の海、三宮を逃げ惑った。一緒に逃げていた消防団員の頭に焼夷弾が突き刺さり、即死。その血を浴びた西阪さんは体中が血だらけとなったが、無傷だった。

空襲の朝、西阪さんの父親は会社に向かったが、家族が危ないと引き返した。余りの猛火に30メートル四方の池に飛び込んだ。息を継いではもぐり、息を継いではもぐりを一晩中、繰り返した。父親は熱風で顔中にひどい火傷を負ったが、生き延びた。母親と姉2人は亡くなった。姉の1人は1か月後、「ご家族ではないか」と連絡があった。父親が飛び込んだ池近くの防空壕そばで発見され、持っていた袋の印鑑でわかった。

濱岡吉孝（福4）さんは、戦争がなぜ起きるかや神戸大空襲の概要を話した。空襲は昭和17年4月から同20年8月の敗戦までに、計128回、死者は7400人、140,000戸が焼けた。神戸の街は焼け野原となり、黒く焼け焦げた遺体があちこちに積み上げられていたという。

竹の台の三島隆夫（生8）さんは長崎で原子爆弾に被爆、ガラスの破片で頭を負傷した。隣の女学校生は勤労動員で造船所で働いていた。原爆投下の朝、「お腹が痛くて休みたい」と母親に訴えたが、軍国の母に「お



上の写真は [bing.com/images](https://www.bing.com/images) から引用しました

国のためだから」と勧められて出勤、爆心から500メートルの造船所で亡くなった。その母親は「余計なことを言わなければ、助かったのに——」と身も世もなく嘆き悲しんだという。

村田洋一（一般）さんと米倉澄子（一般）さんは学童集団疎開の暮らしを話した。食料が乏しく、いつも飢えていた。カエルもバッタも、口に入るものなら何でも食べた。疎開先の村にお世話になっているので、慣れない田んぼの田植えや草取りを手伝った。風呂もままならず不潔なので、ノミ、シラミに苦しんだ。潰瘍がかゆくてたまらず体を掻きまくって血が噴き出した。ちり紙もないので、お寺の障子を破って血をぬぐい叱られたという。

語り部のみなさんは「戦争で亡くなった人たちのお蔭で今日の平和がある。平和の大切さを噛みしめてほしい」と口々に訴えました。

授業が終わり、生徒代表は「生々しいお話をありがとうございました。戦争は絶対ダメ。今も世界各地で戦争している。戦争を避けるためにどうしたらいいか、考え続けたい」と謝辞を述べた。（広報・永野 知己）